原作：カント
AUTHOR：KÁNTO
イラスト：水上二十歳
ILLUSTRATION：MIZUKAMI HATATI

少年と星屑

― Boy And Stars ―

DrawingWriting

少年と星屑

— Boy And Stars —

DrawingWriting

原作：カント　イラスト：水上 二十歳

contents

1. 「二つの一人旅」
2. 「昔語」
3. 「二つの遭遇」
4. 「神隠」
5. 「二つの捜索」
6. 「再会」
7. 「二つの終着」
8. 「願い」
9. 「二つの旅路」
10. 「夜の上で星は輝く」
11. 「一つの二人旅」

第一話「二つの一人旅」

「あ、海だ」

少年が言った。傍らの狼が、彼と共に歩みを止める。

森を抜け、開けた視界。流木の転がる砂浜を十数メートル挟んだ先に見えたものは、少年の言葉通り、真っ平らな水平線だった。

潮の香りに誘われるように、少年は砂浜を真っ直ぐ進んでいく。森の中でも絶えず聞こえていた波の音に加え、砂を踏む音が夜に響いた。

「もう真っ暗だね」

白く砕ける波の向こう、一面に広がる海の色は、空に呼応するかの如く、昏黒に彩られている。その表面には星が、そして蛇のような白いうねりがチラホラと見えていて、それらを抱き締めるかのように、陸地は左右へと広がっている。

狼は視線を左に向け、そして次に右へと向ける。星灯りは余りにも頼りなく、砂浜がどこまで

続いているのか、判然としない。
別れ道。
どちらに進むか。
「どっちに行く？」
狼の思考を読み取ったかのように、少年が振り返って言った。狼はピクリと耳を立て、少年を見つめる。
暫しの、後。
狼の喉の奥から、小さな溜め息が漏れた。
「それとも、今日はこの辺で――」
「終わり」
波の音に塗り変えられそうな程の、微かな言葉。少年は首を傾げ、狼に尋ね返そうとする。
が。
「アンタと歩くの、もう終わりにするわ」
狼は瞬時に少年へ近付き、大きく左腕を振るった。柔らかい肉の感触に構わず、すくい上げるようにその手を振り切る。
一瞬だった。
少年の体は、まるで投擲された槍のように鋭く空を裂いた。それはやがて星の海に消え、一筋

の線となり、消える。
「……バカみたいに綺麗に飛んでったわね、アイツ」
半ば呆れたように狼は呟き、その左腕を大地に刺した。それから、再度左右を見回し、ゆっくりと歩き出す。
左の道――少年の消えた方角とは、別の道へ。